

2015年の1冊

司書4人が今年の印象的な本1冊を選びました。 2015. 12. 11 はと時計178号

今年の読書運動のテーマは「戦後70年」でした。俳人の坪内稔典さんが（戦争時に）戦争の意識が高揚すればするだけ、俳句も俳論もとてもつまらなくなりました。（略）考えが極端に一つになってしまうとき、私たちの言葉はとても貧しくなる、とある書評で書いていました。決まりきったフレーズを貧しく使いまわしているうちに本当に考えるべきことをサボってはいないか？という手に刺さったトゲのような痛い本。『**紋切型社会 言葉で固まる現代を解きほぐす**』**武田砂鉄著 朝日出版社 2015** を反省をこめて今年の1冊にしたいと思います。「全米が泣いた」「禿同」「誤解を恐れずに言えば」など決まったフレーズ例をあげながらその言葉で停まってしまった思考を展開させていきます。「若い人は本当の貧しさを知らない」、戦争を知らない世代が戦争を知っているからというだけで戦争経験者から議論を封殺されてしまうのはおかしい。歴史が旧世代の安堵のためだけに使われている。でも歴史は現代を見るために使われるべきだ。という部分、考えさせられました。本当の戦争とはどんなものなのか、真摯に検証して考えようとする若者の態度の方が、若いもんにはわからないという老人の態度よりも戦争を風化させないということ。言葉をよく考えて使うことは誠実な態度をみせるということなのだと改めて教えてくれたトガった本でした。（眞鍋）